

なしの紅粒がんしゅ病の発病が多い ～ 早期に発病部位を除去し、薬剤塗布を徹底しましょう ～

1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

11月中旬のなし巡回調査における主枝・垂主枝の発病枝率は5.5%（平年3.4%）でやや高く、同地点率は80.0%（平年60.0%）が高かった。また、側枝の発病枝率は2.1%（平年1.0%）で高く、同地点率は60.0%（平年45.0%）でやや高かった（表-1）。

本病は秋～翌春（10月～翌年4月頃）に、分生子子座と子のう殻から胞子（分生子、子のう胞子）が雨で伝搬する（図-1）。そのため、降雨があるとせん定の切り口、ねん枝時や凍寒害などによる傷口からの感染が増加し、翌年の発生量が多くなると予想される。

2. 防除対策

早期に樹体検診を実施して発病状況を確認し、以下の防除対策を行う。

1) 耕種的防除

発病部位は木質部まで感染が進行しているため、発病枝は病斑部と健全部の境界から基部方向に30cm程度切り戻す。側枝に病斑が確認された場合は、側枝全体を間引く。骨格枝上に病斑があるため切り戻すことができない場合は、木質部が褐変している部分を完全に削り取る。

せん定した枝は園内に置かず、適切に処分する。樹勢の低下により発生が助長されるので、栽培管理を適正に行う。特に凍害部からの感染が多いため、凍害防止に努める。

2) 薬剤防除

発病部の切り戻しや削り取りの跡にはトップジンMペーストの原液を塗布する。また、せん定の切り口、ねん枝時に生じた傷口などにもトップジンMペーストの原液を塗布し、感染を防止する。塗布は削り取りやせん定を行った当日のうちにやる。

3. 資料

表-1 巡回調査(11月中旬)における紅粒がんしゅ病の発病状況

	主枝・垂主枝	
	発病枝率(%)	発病地点率(%)
2023	5.5	80.0
平年	3.4	60.0
概評	やや多	多
	側枝	
	発病枝率(%)	発病地点率(%)
2023	2.1	60.0
平年	1.0	45.0
概評	多	やや多



図-1 秋期に形成された分生子

【 問合せ先 】

秋田県病虫害防除所	TEL	018-881-3660
秋田県果樹試験場	TEL	0182-25-4224
天王分場班	TEL	018-878-2251
掲載HP	https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/	